

## 第 11 回「考えをまとめる文章の組み立て方」

### 1 自分の意見をまとめる

世の中には正解というものが定められていない問題がある。正解を探すのではなく、「自分で『自分の正解』を決なければならない問題である。

世の中にはたくさんの人々がいる。自分とは異なった考え方や価値観や生活信条を持った人と協力しあいながら仕事を進めていかなければならない。仕事を進めて行くうえで問題が生じた場合、「自分たちの正解」を決めなければならない。そのような場面で「自分の正解」を説明できる人間になりたいものである<sup>1</sup>。

そこであなたが提案する「あなたの正解」は、もしかしたら相手が考えている「相手の正解」とは異なったものかもしれない。そのような場合には両者をすりあわせながら、双方にメリットのあるような「新しい正解」を探して行く必要がある。もちろん、あなたは、自分の答えを強引に押し通したいかもしれない。押し通すにしろ譲り合うにしろ、まずは自分のアタマの中を整理して、「結論は何なのか・それはなぜなのか」を相手に伝えないことにはハナシにならない。今回はその練習をしてみよう。

### 2 もしもあなたが「東京でオリンピックを開催するか 開催しないか」を決めてよいと言われたら？

昨年 6 月 17 日、石原慎太郎 東京都知事は、「オリンピックを東京で 2020 年に開催する」意志を表明した。オリンピック招致は、昨年 4 月 10 日に行われた都知事選の公約でもあり、その意志を再度明らかにしたことになる。東京都がオリンピック候補地として立候補したが、最終的に開催地として選ばれるかどうかは不明である<sup>2</sup>。

#### 2.2 グループワーク：「開催するか開催しないか」を決める

もしもあなたが「東京でオリンピックを開催するか 開催しないか」を決めてよいと言われたら、あなたはどうするだろうか。開催するか開催しないかを決定し、その根拠を簡潔に述べてみよう。

---

<sup>1</sup> もちろん、誰かに決めてもらう人生も悪くはない。しかし、ぜんぶ面倒をみてくれるヒトはこの世の中にはいない。自分でどうにかしなければならないのが人生である。

<sup>2</sup> 2016 年の開催地として立候補したが敗れている。

## 2.2 参考意見を探してみよう

「あなたの答え」を決めた後、世の中にはどのような意見があるのか、自分の結論を支持する意見はあるか、自分の結論を**支持しない**意見はあるか、を探してみよう。人間は自分に都合のよい意見を集めて安心してしまいがちだが、実際には自分と**反対の意見のほう**が重要である。なぜなら、反対意見に耳を傾けることによって、あなたの意見の**弱点が見つかる**ことがあるからだ。

新聞の社説を読み比べてみると、世の中にいろいろな意見があることがわかる。ここではオリンピック招致についての最近の社説を読み比べてみよう。

### (a) 2011年6月18日(土), 朝日新聞

#### 『東京五輪 都民は望んでいるか』

また、東京にオリンピックを招致したい。石原慎太郎都知事がきのう、そう表明した。

落選した2016年大会につづく挑戦で、20年の開催をめざす。「大震災からの復興」をキーワードに、9年後に立ち直った日本を世界に見せようと訴えていくという。

日本オリンピック委員会(JOC)は、すでに会場計画がある東京の再挑戦を歓迎し、一部の競技を被災した東北地方で実施するプランも温めている。

「平和」を旗印に意欲をみせていた広島市は市長交代で撤退しており、この夏までの国内選考は、東京が正式に名乗りを上げればすんなり決まりそうだ。

だが、13年9月の開催地決定をめざして走り出す前に、確認しておくべきことがある。

まずは、国民、とりわけ都民は開催を望んでいるのか、だ。

招致活動だけで100億円規模の巨費が飛び交う。それなのに前回はあまり盛り上がりせず、国民も都民も支持率は50%台にとどまった。最終選考に残った4都市で最も低かった。あのとき、世論に変化があるようには見えない。

東京都には招致のために積んできた基金が4千億円ある。これだけの資金を未来に生かす方法はいくらかもある。それを五輪につぎ込んでいくには、世論の支持を確かめてほしい。

もうひとつは、東日本大震災後のこの国のあり方を、どう考えるのかである。

石原知事は「東京が日本のダイナモ(発電機)になる」と主張する。たしかに、1964年の東京五輪のころ、日本は首都を中心に経済的な発展の上り坂を駆け上がっていた。

だが、五輪に合わせて再び都心の基盤を整えれば、いま以上に東京一極集中をすすめかねない。首都圏を大地震が襲うことも想定されるなか、いま求められているのは、もっと多極分散型の国づくりではないか。

ただ、招致の客観情勢は、南米初のリオデジャネイロ(ブラジル)に屈した前回よりは期待が持てるかもしれない。アフリカ初の看板で有力視された南アフリカが先ごろ断念したため、いまのところのライバルは前回の東京大会の1回前の開催地だったローマくらいなのだ。

ひとつの山場は7月に来る。18年冬季五輪の開催地が決まるのだ。3回連続で挑む平昌(ピョン・チャン)(韓国)が勝つと、18、20年と冬夏連続でアジアで開くことへの抵抗感が国際オリンピック委員会(IOC)に生まれかねない。

招致に乗り出すかどうか。まずは都議会の議論に注目する。

**要約するとこんな感じである：**都知事がオリンピックを東京に呼ぶと意志表明したよ→準備も進んでいるよ→でも都民はオリンピック開催を望んでいるのかな?→前回呼ぶと言ったときの支持率は低かったし、お金がかかるよね→オリンピックをやると東京一極集中が進むから、地震国のリスク分散にならないよね→ライバルがローマだけだから東京開催になるかも→都議会はどう判断するのかな。

(b) 2011年6月19日(日), 読売新聞

『東京五輪招致 復興の証しに聖火を灯したい』

東京都の石原慎太郎知事が、2020年の夏季五輪を招致したいとの意向を表明した。

9年後、東日本大震災の惨禍から立ち直った日本の姿を、世界に見てもらおう復興五輪にするという。知事は都議会で「世界中から寄せられた友情や励ましへの何よりの返礼となるに違いない」と意義を強調した。

東京開催が決まれば、復興に向けて、日本に活力を与える起爆剤ともなり得るだろう。

20年五輪の開催地は、2年後の国際オリンピック委員会（IOC）総会で決定する。聖火が再び東京に灯もよう、招致の動きに弾みをつけていきたい。

東京は16年五輪の招致失敗を経ての再挑戦である。16年の開催地に決まったブラジルのリオデジャネイロは、「南米初の五輪を」と訴えて、広範な支持を得た。

これに対し、東京は、なぜ五輪を開くのか、という明確なメッセージを欠いていたことが、前回の招致失敗の教訓といえよう。

戦後復興の象徴だった1964年の東京五輪に続き、大震災からの復興の証しとしての五輪を、という今回の主張は、各国の共感を得られるのではないだろうか。

前回は低調だった国内世論を盛り上げるためには、復興五輪の意義やメリットを国民に分かりやすく示すことが大切だ。

都は、16年五輪のために積み立てた約4000億円の基金を今も保有している。交通機関や宿泊施設など優れた都市機能がある。治安の良さも広く知られている。

東京のこうした面は大きなセールスポイントとなるだろう。

被災地で競技の一部を実施する案もあるという。ぜひとも具体化させてほしい。

20年五輪には、既にローマが名乗りを上げている。招致レースを勝ち抜くには、国を挙げでの取り組みが必要だ。石原知事も「国やスポーツ界、経済界など国家の総力が結集され、機運が盛り上がるのが不可欠だ」と語った。

折しも、スポーツ政策を国家戦略として推進することを規定したスポーツ基本法が、17日に国会で成立した。新法は、五輪など国際大会の招致、開催のために、国が資金確保などの面で「特別の措置を講ずる」と定めている。

今は復旧・復興財源の確保に全力を挙げるべき時だが、いずれ政府として、五輪招致をどう支援していくのか、姿勢を示す必要がある。都や日本オリンピック委員会（JOC）などと連携し、検討を進めてもらいたい。

要約するとこんな感じである：都知事がオリンピックを東京に呼ぶと意志表明したよ→ぜひ東京に呼びたいね→前回の失敗を活かそう→外国からの共感を得よう→国民の理解を得よう→お金もあるしインフラも整っているよ→国を挙げて盛り上げよう→震災復興は大事だけどオリンピックは呼ぼう→政府はどうやってオリンピックをもってくるのかな。

(c) 2011年6月21日(火), 日本経済新聞

『東京五輪を実現するためには』

東京都の石原慎太郎知事が、2020年の夏季オリンピック大会の招致に意欲を示している。16年大会の招致でブラジルのリオデジャネイロに敗れた東京が再び挑む。

日本への夏季五輪招致では、1988年大会の名古屋、08年大会の大阪、16年大会の東京と3回続けて敗れている。20年の開催が実現すれば、64年の東京大会以来となる。

東京は16年大会の招致で、競技施設を都心部に集約する「世界一コンパクトな五輪」を打ち出し、環境に配慮した開催計画をまとめた。1次選考ではその時点で立候補していた7都市の中で最高の評価を受けたが、09年の最終選考で敗れた。

再び招致に乗り出す石原知事は、「被災地をはじめ日本全体とスクラムを組んだ招致を」と語っている。64年の東京五輪が戦災から復興した日本の姿を世界に示したのと同じように、東日本大震災からの再生を最大の開催目的に位置付ける。

今回の震災では世界各地から多くの支援が寄せられた。五輪を通じて新しい日本の姿を示し、「友情や励ましへの返礼にする」という石原知事の狙いは理解できる。

ただし、招致を実現するには課題も多い。20年大会には現時点でローマが名乗りを上げている。五輪は都市が主役とはいえ、実際の招致運動は国家間の競争になっており、政府の全面的な支援が必要だ。16年大会の招致では、都民、国民の支持が高まらず、敗退の一因になった。今回も国内世論の動向がカギになる。

「復興五輪」を掲げるなら、被災地との連携も不可欠だ。五輪は一都市開催が原則だが、東北で少しでも多くの競技や催しを開きたい。

開催経費を抑え、招致費用の透明性を高めることも課題になる。東京で五輪を開催するために、被災地の復興が遅れては本末転倒だろう。

大会は9年先だが、招致は今後2年間で勝負。20年の開催地は13年9月の国際オリンピック委員会（IOC）総会で決まり、その前にIOCの関係者が立候補地を視察する。

それまでに原子力発電所の事故を収束し、電力の供給不安などを解消しなければ、不利になる。そして、被災地が復興に向け力強く前進していることが何よりも重要である。

要約するとこんな感じである：都知事がオリンピックを東京に呼ぶと意志表明したよ→何度も敗れているし、前はもうちょっとだったんだ→震災復興を開催目的にするんだって→でもローマとの競争になるから政府が全面的に支援しないと勝てないね→世論はどうか？→被災地との連携、予算の使い方、被災復興との両立が課題→今後2年間で勝負→原発事故を収束させ、被災地の復興も進めよう。

新聞社によって同じテーマでも結論が違ったり、とらえる角度もちがうのだ。

### 3 もしあなたが「サマータイムを実施するか実施しないか」を決めてよいと言われたら？

サマータイム(夏時間)を実施するか実施しないかで世の中では毎年意見が割れている。これも正解の定められていない問題である。しかし、実施するか実施しないかのどちらかしか答えはない。どちらかに決めなければならない。

#### 3.1 グループワーク：「実施するか実施しないか」を決める

もしもあなたが「サマータイムを実施するか 実施しないか」を決めてよいと言われたら、あなたはどうするだろうか。実施するか実施しないかを決定し、その根拠を簡潔に述べてみよう。

といっても、これはいろいろな情報を集めてみないことには結論が下せない問題である。そこで、ひとまず今日は「実施するか実施しないか」だけを決めておき、来週もう一度考えなおす機会を設けることにしよう。今回は、直感でもよいので結論を下すところまでにしよう。

#### 3.2 来週までの課題：再度「実施するか実施しないか」を決める

あなたのグループの意見に対して、その意見を**支持する**意見・データ・情報をサーチし、考えをまとめてくる。同じように、あなたのグループの意見に対して、その意見を**支持しない**意見・データ・情報をサーチし、考えをまとめてくる。

#### 3.3 次回のグループワーク

一週間で収集した意見・データ・情報に基づき、今回の結論を維持するか、それとも変更するかを決める。そして、その根拠を簡潔に示す。

□

修正：2012-06-30